

KYORIN JEC

Winter 2006

KYORIN JFC

Winter 2006

Contents

八王子キャンパスだより	
応用コミュニケーション学科・表現メディアコース紹介……………	2
八王子キャンパスが変わりました……………	3
論文翻訳コンテスト結果発表……………	4
学生生活だより　ゼミナール紹介……………	9
赤井ゼミナール・嵐ゼミナール	
伊藤ゼミナール・稲垣ゼミナール	
今泉ゼミナール・岩崎ゼミナール	
江戸ゼミナール・木崎ゼミナール	
楠家ゼミナール・熊谷ゼミナール	
黒田ゼミナール・小山ゼミナール	
諏訪内ゼミナール・詹ゼミナール	
高木ゼミナール・田中ゼミナール	
玉村ゼミナール・千野ゼミナール	
塚本ゼミナール・豊田ゼミナール	
鳥尾ゼミナール・中村ゼミナール	
野口ゼミナール・長谷川ゼミナール	
原田ゼミナール・パロケッティゼミナール	
古本ゼミナール・本田ゼミナール	
マクミランゼミナール・吉村ゼミナール	
渡辺ゼミナール	
杏園祭をふりかえって	
詹・大水・高木／伊藤……………	28
編集後記……………	32

表現メディアコース紹介

教授 原田範行



2006年度入学生から、外国語学部は英語、東アジア、応用コミュニケーションの3学科による新しいカリキュラムで出発しました。その中で応用

コミュニケーション学科は、これまでの外国語学部での教育・研究の蓄積、特に学生諸君の実践的な語学力とコミュニケーション能力を育成するという姿勢を生かしつつ、それをより発展的・応用的な形で社会に還元することを目的として設置された学科です。具体的には、やはりこれまでの学部教育の成果を十二分に活用する形で、表現メディアと観光文化の2コースが設けられました。

表現メディアコースが基礎としている教育のポイントは3つあります。一つは、まず学生諸君の表現能力そのものを丁寧に開発していくということです。今日のメディア社会にあっては、実に多くの情報発信手段がありますが、ともすると、機器類を主とした情報の媒介物に関する技術論が先行しがちで、心の交流、あるいは情意を尽くしたしかも正確なコミュニケーションという中味の洗練が置き去りにされる傾向にあると言えます。本コースに学ぶ学生諸君には、相手の立場と気持ちを正確に理解するとともに、自ら状況を的確に判断し、その情報を発信できる表現者であってほしいと願っています。本学部の基盤教育で培われた英語や中国語の語学力とホスピタリティの精神、そして何と云っても日本語表現力に、多彩な専門教育を通じていっそうの磨きをかけること、これが第一の目標です。

第二の目標はメディア研究です。先に述べましたように、今日、情報を媒介する媒介物としてのメディアには、実にさまざまなもの

があります。テレビやインターネット、新聞・雑誌はもとより、広告や看板、各種の印刷・出版物、さらには、ライフスタイルを左右する服飾やデザインなども、広くメディアと考えてよいかも知れません。そういう媒介物の特性を十分に理解し、その見識を社会に生かすことは、情報の中味（コンテンツ）を創造することと並んで、情報社会の行方を左右する課題であると考えます。「ジャーナリズム論」「印刷・出版文化論」「映像文化論」「情報発信特論」「ライフスタイル・コーディネート実習」等々、本コースには外国語学部の特性を生かしたメディア研究の科目が揃っています。

そして第三の目標は、本コースの根幹、すなわち優れた情報そのもの、つまり中味（コンテンツ）を創造できる人材を育てるということです。古今東西の優れた文学や絵画などの芸術作品が人間社会に大きな影響を与えていることは言うまでもありませんが、新聞記事の一つやほんの数分のテレビのCMであっても、私たちの社会をリードし、また多くの人々に救いや癒しの機会を与える場合が少なくありません。社会情勢と人心のありかを的確に把握し、然るべき情報を適切な形で創造する——これは、今後の情報社会において最も必要となる能力の一つであると思われます。もちろん、そうした情報を創造することは容易ではありませんが、本コースでは、さまざまな表現芸術から広告研究に至るまで、各種の実践的な科目によってまずは歴史を動かしてきた優れた作品を精密に考察することで、表現者＝情報の創造者としての有為な人材を社会に送り出して行きたいと考えています。

新学科・新コースが発足してまだ1年余り、教育スタッフもなお試行錯誤の部分がありますが、英知を結集して教育と研究に邁進したいと考えております。ご父母の皆様のご支援を心よりお願い申し上げます。

八王子キャンパスが 変わりました

外国語学部学生有志

⊗〈ホール杏〉が改装されて、とてもよくなった。電光掲示板でメニューの写真を



ホール杏の電光掲示板

とができるようになった。(D. K.)

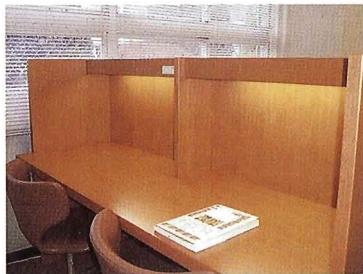
⊗一番大きな変化はバスターミナルです。以前より広くなりました。バス通学者が多い杏林が力を入れるべきところだと思います。

(E. H.)

⊗〈ホール杏〉はきれいになりましたが、味の改善はまだされていないと思います。メニューの質の向上を期待します。(A. S.)

⊗今回いろいろな所が改善されましたが、パウダールームが設置されたことによって、女子学生にとって落ち着ける空間が出来ました。とても助かっています。(A. Y.)

⊗この秋から喫煙場所を狭めるなど、禁煙キャンペーンにも積極的に取り組んでいるように見えます。その一方で、落ちている吸殻が増えていることは今後の課題と思われます。(N. O.)



電気付キャレルデスク

電気がついたのはとても助かる。私は視力があまりよくないので文字の小さな本を読む時

⊗この秋、図書館の机に電気がついた。私は図書館をよく利用し、暗くなってもまだ居ることがあるので、

には苦勞していたが、今では快適に過ごすことができるようになった。また、検索用のパソコンも増えて、図書館の利便性が高まったと感じている。(M. A.)

⊗バスターミナルが移設されたことにより、バス通学者の坂を登る距離が短くなりました。(Y. K.)

⊗構内にコンビニがオープンしたことが大きな変化です。以前は杏林坂の下まで行かなければなりませんでした。今ではとても便利になりました。(Y. H.)

⊗〈ホール杏〉の改装によって、学食に清潔感が感じられるようになりました。席数が少なくなったことは難点でもあります。それによってゆとりのある空間が生まれたことも確かです。(C. H.)

⊗コンビニが出来てとても便利になりましたが、〈ラウンジ緑〉のパン屋さんがなくなったことが残念です。



コンビニ

(N. M.)

⊗女子学生対象のパウダールームが設置されたことは、今回の改修の一つの大きな特徴であると思う。(R. A.)

⊗〈ホール杏〉が改装によってとても明るくなりました。また、スクリーンに見立てた壁に映画が上映されているので、お昼を食べながら映画を観ることもできるようになりました。(N. S.)

⊗以前のバス停は狭くて、並んでいてもバスの停車位置によっては列が崩れてしまい、並ぶ意味がなくなるバス停だった。新しいバスターミナルでは順番どおりにバスに乗れるようになったので、並ぶ意味ができたことが何よりもよかった。(J. K.)



新しいバスターミナル

杏林大学
外国語学部主催

高校生対象第2回論文・翻訳コンテスト審査結果

今回のコンテストには、論文部門345点、翻訳部門421点の合わせて766点ものご応募をいただきました。まずは、ご応募くださった皆様に心より御礼を申し上げます。

応募数の内訳は、下表のとおりでした。予想通り、英文和訳の応募が最も多かったのですが、昨年度は応募のなかった中国語の翻訳に応募があったこと、論文部門の4課題にバランスよく応募があったことには、主催者一同が喜びました。

審査は、各課題に2名ずつの審査委員が担当しました。厳正なる審査の結果、下表のとおり、論文部門は、和光真理江さんの作品が、翻訳部門は、山崎友莉子さん、奥山陽子さん、高木幸子さんの3作品が優秀賞に、10作品が奨励賞に選ばれました。おめでとうございます。

部	課 題	応募数	賞名	受賞者氏名
論 文	私の英語勉強法(語学学習法)	92	優秀賞	和光真理江さん
	私のまちの観光資源	77	奨励賞	松尾ひかるさん
	世界に誇れる日本文化	98	奨励賞	石岡奈未可さん
	私の見つけた日本語の不思議	78	奨励賞	高尾明日香さん
翻 訳	[日本語→英語]	31	優秀賞	山崎友莉子さん
			奨励賞	山崎 麻里さん 市川 秀幸さん
			奨励賞	高木 幸子さん
	[日本語→中国語]	17	奨励賞	趙 琳琳さん
			奨励賞	奥山 陽子さん
	[英語→日本語]	367	優秀賞	江里口瑛子さん
奨励賞			南 ひろこさん 塩島 梨奈さん	
奨励賞			高木 幸子さん	
[中国語→日本語]	6	優秀賞	高木 幸子さん	

以下は論文部門・英語翻訳部門を担当した審査委員からの講評と優秀賞受賞作品です。

その他の受賞作品は外国語学部ホームページの「高校生論文・翻訳コンテスト」のページよりご覧下さい (http://www.kyorin-u.ac.jp/univ/faculty/foreign/contest_06/index.html)。在学生の皆さんも、高校生に負けられないように各課題に取り組んでみてはいかがでしょうか？

論文部門講評

教授 稲垣 大輔

論文部門は、金田一秀穂教授はじめ、各課題に2名ずつ、総勢8名で、まず一次審査を行い、各課題から数点優れた作品を選出しました。「日本語力」「文章力」「論文構成力」「説得力」「調査力」「オリジナリティ」などの要素を共通の選出基準としました。二次審査は、審査委員8名全員が、一次審査で選出した全作品を読み直し、全員一致となるまで協議した結果、優秀賞1作品、奨励賞3作品を選びました。

優秀賞に選ばれた和光真理江さんの作品は、「私の『使える英語』」と題して、真の英語力とは何かを論じたものです。和光さんの「使える英語」観には、英語が話せず・聞けなかった幼少の2年間と、英語を正確に読み・書く必要性に気づかされた高校1年間の、貴重な海外体験が活かされています。話し、聞く、音声によるコミュニケーション能力と、読み、書く、文字によるコミュニケーション能力の両方が必要であることを主張する、語学学習の本質に迫る説得力のある論でした。「『話し・聞く』から『読み・書く』へ」という、自然なことばの習得過程を、母語である日本語だけでなく、外国語である英語でも体験した和光さんの語学学習法は、日本人の英語学習に対する示唆に富むものです。「使える英会話」と「受験英語」、言い換えれば「音声重視」と「文字重視」の、いずれか一方を偏重せず、バランスよく学ばねば『使える英語』にならないという主張に、審査員一同、共感しました。

奨励賞に選ばれた3作品も、各課題の中では最も優れたものでした。松尾ひかるさんの「真の観光資源の維持について」は、自然と文化遺産を保つことと、心の観光資源を高めることが大切であるという2点に論点を絞り込み、論旨明晰で素晴らしいものでした。沖縄という観光資源に富んだまちで暮らす人々を代表して、郷土を愛する気持ちをいかな

く表現しているところが評価されました。ただ、文末が「です・ます」調になっていますが、論文では「だ・である」調で書いていただければもっと良かったと思います。

石岡奈未可さんの「世界に広がる熱い力」は文章力に優れた作品です。特に、冒頭部分は、ねぶたの臨場感を見事に表現し、読者を引き込む筆力があります。後半部分を、課題が意図した「世界に誇れる」という部分に焦点を当て、論を展開してくれればさらに素晴らしい作品に仕上がったのではと感じました。

高尾明日香さんの作品は、日本語は、ひらがな、漢字、カタカナの三種の文字を使う点が不思議であり、魅力でもあると論じました。柔らかく優しいひらがな、堅く難しい印

象を受ける漢字、外来語独特の印象を受けるカタカナ、これら三種の文字を使う日本語は、強国にのみこまれず、うまく融合し適応する日本の歴史を反映するものであると。普段何気なく使っている三種の文字に、不思議さを発見し、疑問を抱くという姿勢は、あらゆる学問、探求にもつながる重要な視点です。ただ、疑問・問題が見つかったら、自分で調べたり、具体例を探してみたら、もっと興味深い論文になっていたのではと思います。

いずれにせよ、入賞した4作品は高校生が書く論文としては秀逸であり、私たち審査員は、若い新鮮な感性に触れることができ、論文コンテストを開催してよかったと思いました。

私の『使える英語』

東京 学習院女子高等科 2年 和光真理江

近年、多くの英会話教室が「使える英会話」を身に付けることを宣伝している。大学受験において必要とされる、細かい英文法などに対する批判が社会一般にある。しかし彼らの主張する「使える英語」とは一体どのような英語なのだろうか。私にとって「使える英語」とはさまざまな意味を持つ。

実は私は帰国子女である。六歳から八歳の二年間をカリフォルニアで、高校の一年間をニューヨークで過ごした。

初めてアメリカに行った時、私は殆ど英語を話せず、現地校での授業の内容はおろか、友達との会話すら全く分からなかった。お喋りな私が一言も話せなかった為、悔しくてたまらず、毎日夜遅くまで母と共に英語を勉強した。その為一年目の末には、日常会話や授業が全て分かるくらい英語が話せる様になった。私は子供ながらに非常に嬉しかった。退屈だった毎日の授業が理解出来る様になり、友達が沢山作れたのだから。

しかし私の英語との関いはその二年間で終わる様なものではなかった。子供は英語を覚えるのも早い、忘れるのも早いと一般的に言われていた。私は、苦勞して覚えた英語をそう簡単に忘れるわけにはいかなかった。将来きっと英語は「使える」と信じ、CWJが開催していた帰国子女用のサークルに参加した

り、学校の提供する英語教室に通ったりした。日本では英語を話せる機会が少なかった為、このような機会は私にとって楽しい一時であった。そのみならず、出来るだけテレビは英語の番組を見て、音楽は全て洋楽を聴いた。

中学において私の学校は週に五回英語のクラスを設けていた。そこでは、私の知らない、いわゆる「受験英語」というジャンルの英語が待ち構えていた。学校の英語は難しい語彙や正しい文法、塾では英作文や英文和訳の連続であった。英語を得意とする私でもくじけそうになったある日、とある先生がこのようにいった。

「最近、『使える英会話』が賞賛され、受験英語が蔑ろにされていますが、あの『使える英会話』とは海外旅行でちょっと使える様なものですよ。君達、そんな英語が使いたいわけじゃないでしょう。実際国際社会にでた時に使える英語はあんなに甘いものではない。だからくじけずがんばりなさい。」

私はその言葉に感動した。なぜなら私がかつて得意としていたのは海外旅行や友達との会話ごときの簡単な「使える英語」だったのだ。国際社会にでた時、文法的な誤りのある言葉でプレゼンテーションをする人に、一目置く人はいないだろう。英語は話せるが、その英語を正しい日本語に訳せない人をどうし

て会社が雇いたくなるだろうか。

そういわれた次の一年間を私は、再びアメリカで過ごした。日常会話ができることはとても便利で、友達もすぐ作ることができた。しかしそれ以上に、高校生活で必要だったのは、中学の英語勉強で学んだ英語の読解力、単語力、そして正しい文法だった。やはりアメリカの高校でも上級のクラスを受講するには、日本でいう受験英語のような難易度の高い英語を読み書きできる能力が要求された。その時私は身をもって実感したのだ。結局自分が一目置ける人間であると国際社会で認められるには、一見使えない様に思われる、細かすぎるほど正確な英語が必要なのだと。

しかし、いわゆる「受験英語」が持つ短所はなんであろう。確かに英会話教室が主張するように、あまり話す能力を養成しないのだ。それでは世界の人々と会話をする事も出来なく、自分が対応する人々の言葉を聞き取る事も出来ないではないか。だから私は受験英語も英会話教室の英語も両方同じくらい必

要であり、どちらかが少しでもかけてしまえば、それこそ、使えない無駄な英語になってしまうと思う。

従って私は今、正確な英作文と和訳を学ぶ一方で、正しい話し方と発音も維持しようとしている。また、自ら洋画をみて、洋楽を聴き、タイムなどの雑誌を読み、近代頻繁に使われる英語をも学ぼうとしている。

現代の日本人に必要なのは、自分にとって「使える英語」とは何かを見極める力であると思う。私は国際関係に興味があるのだが、そのような職業につくには、正しい英語を読む事、書く事、話す事の全てが必要とされると思う。その証拠に、新渡戸稲造や緒方貞子の英語は驚くほど正確で美しいし、彼等の日本語も同じくらい素晴らしい。私は彼等の様な職に就きたいから、彼等が獲得した様な英語を勉強しているのだ。それはただ文を読み、書くだけでなく、流暢な英語が話せるだけでもなく、両方出来る様になることである。それが私の「使える英語」だ。

翻訳部門（英語→日本語）講評

教授 原田 範行

今回、英語→日本語部門には367件の応募がありました。原文は、日本の道路事情を描写した平易で洒落な英文。審査にあたっては、原文の正確な理解を前提に、軽快なテンポを活かした翻訳を評価することにしました。原文の正確な理解に関しては、特に次の2点で誤解が目立ちました。一つは、2段落の“live up to the ‘service’ part of the name”（「まさにサービスの名にふさわしい」）。もう一つは、3段落末尾の“apan’s traffic problems are cleverly convincing more and more people to get around this problem”（「(人々は)日本の交通事情を通じて、渋滞を回避する賢い方策を見出しつつある」）。特に後者は、誰が何をどうしつつあるのか、という基本的な関係を見落とした逐語訳が少なくありませんでした。無生物主語の捉え方や時制への意識、副詞の処理などについて、よく復習していただきたいと思います。原文の持つ軽快さについては、優秀賞・奨励賞を受賞された皆さん、特に奨励賞の塩島さんの訳文がよく工夫されて

いました。

審査の結果、奥山さんが優秀賞、江里口さん、塩島さん、南さんが奨励賞となりました。奥山さんの翻訳は、“service”を「接客」としており、含意の点で多少問題が指摘されましたが、全体として非常にしっかりとした翻訳となっており、十分優秀賞に値すると判断しました。江里口さん、南さんの訳文も評価できるものでしたが、細部において若干の誤解があり、奨励賞となりました。塩島さんについては、上記の通り、テンポのよい訳文に仕上がっていましたが、やはり最後の部分がごちなく、奨励賞となりました。

審査員は一通ずつ丁寧に審査しましたが、その過程で高校生の皆さんの英文理解や翻訳に対する関心の高さを改めて実感しました。単なる和訳とは違い、翻訳は、適切な日本語に表現するという事を通じて原文を正確に理解するという作業です。異文化間コミュニケーションの第一歩として、是非、翻訳の力をさらに磨いてほしい、と思っています。

翻訳部門（日本語→英語）講評

助教授 伊藤 盡

31通もの応募の中で優秀な翻訳作品に共通して見られたことは、日本語を直接英語とするのではなく、英語として自然な表現を努めて探そうとしていることだった。和英辞典を引いても、日本語というのは文脈によって意味が異なる。「もとより」という日本語は様々な意味があるが、課題文における意味は決して‘from the beginning’という意味ではない。英語に翻訳するという作業は、日本語の独特の表現を英語の表現で表すものだから、文字通りに訳すことは意味がないのである。その意味で、at any rate, や of course がいいだろう。課題文で特に注目したポイントは、①日本語の「言い間違い」をいかにして英語でも「言い間違い」らしく表現するか、ということと、②日本語の「火花が日頃見慣れたものの異なる相貌を照らしだすように、失言は常識という名の秩序を一瞬だけ攪乱するのだ」というロジックを英語のロジックでいかに表現するか、という2点である。特に②のロジックは日本語独特の言い回しで、これをそのまま英語にしたのでは意味が通らない。英語に翻訳するということは、論理的にも意味の通るように言葉を言い換えねばならない。

山崎（以下敬称略）の優秀作品では、ポイント①が出色の出来であった。地震と津波の語順を間違えただけで意味の転倒が起こってしまうおかしさをよく伝えていると思う。またポイント②も英語として自然なロジックとなっていて、見慣れたものの‘differences’や‘unfamiliarity’が‘confusion’をとって、笑いを生むための‘unexpected distortion’に感じられることを、名詞のヴァリエーションで表現しているところが素晴らしかった。

奨励作品の市川もポイント①をうまく処理している。ポイント②のロジックの甘さが問題となったが、英語を日本語に置き換える能力は高いと思うので、これからは意味を考えながら「翻訳」に挑んで貰いたい。奨励作品の山崎はポイント②において自分なりに工夫を試みて、「火花」を‘flame’に置き換えて、「炎の中で見えるもの」という表現に変えようとしている。翻訳を行う心構えとして大切な柔軟性があると思われた。奨励作品は、どちらも欠点はあるものの、英語としての自然さを求めている、今後の精進が期待でき、激励を送る意味を込めて選出した。

翻訳部門優秀賞作品紹介

「翻訳 日→英」

1 次の文章を英語もしくは中国語に翻訳しなさい。

「この津波による地震の心配はありません。」アナウンサーは臨時ニュースの最後にこう付け加えた。罹災者がこれを聞いて微笑しうるかとはともかく、失言は多く笑いの源泉となる。もとよりそれは話し手に対する嘲笑ではない。火花が日頃見慣れたものの異なる相貌を照らしだすように、失言は常識という名の秩序を一瞬だけ攪乱するのだ。

(佐藤 図「失言」)

神奈川 慶應義塾湘南藤沢高等部2年 山崎友莉子

“There is no risk of an earthquake from this tsunami,” the announcer added after the news flash. Whether people in the affected area would see the humor in this or consider it inappropriate and offensive is unclear, but such slips of the tongue, more often than not, make people laugh. However, this laughter is not the contemptuous kind, mocking the speaker. As a spark of fire makes common objects look suddenly different and unfamiliar in its light, one lapse of speech can create momentary confusion and cause us to laugh at this unexpected distortion of the world around us.

「翻訳 英→日」

2 次の文章は、日本に住む英国人男性の書いた文章です。日本語に翻訳して下さい。

Traffic lights in Japan confuse me. First, there are the colors ; no matter what I say, my Japanese friends insist the green light is blue. In England the red light means stop, whereas in Japan, it seems that for many drivers, the first few seconds of red light don't actually count. This tends to be particularly true for trucks and taxis, which often appear to be exempt from road rules altogether.

The best part of driving in Japan has to be the service stations. As well as the price of petrol being cheaper than in England, the attendants really live up to the "service" part of the name. With the efficiency of a Formula One pit crew, they quickly fill the tank, clean your windshield and take your rubbish. Then someone even helps you get back into the flow of traffic, with everyone bowing as you leave. It provides a welcome time of rest and relaxation before heading back into the congestion.

Maybe all the problems of Japanese roads are actually advantages. If the government constantly tried to make road travel cheaper and easier, then perhaps more people would use their cars. This, of course, would make the roads crowded and the environment more polluted. To improve its transportation system, Japan has invested in one of the best train networks in the world. Its railroads are fast and reliable. Perhaps as the rest of the world heads toward gridlock, Japan's traffic problems are cleverly convincing more and more people to get around this problem.

('Postcards from Japan' by Chris Willson)

神奈川 横浜雙葉高等学校2年 奥山 陽子

日本の信号機に私はまごついてしまう。何よりもその色にである。私が何と言おうとも、日本人の友人は緑信号を青だと言って譲らない。また、イングランドでは赤信号は停止を意味するのだが、日本では多くのドライバーたちがなんと赤信号のはじめの数秒間を赤信号だともみなしていないようである。こんなことはとりわけトラックやタクシーにありがちなことだが、たいてい道路交通法違反を免かれているようだ。

日本で自動車を運転していて一番よいと思うものはなんと言ってもガソリンスタンドだ。イングランドに比べてガソリン価格が安いし、それだけでなく従業員は「接客」業というその名の通りの仕事ぶりをみせてくれる。まるでF1のピットで待機しているチームメンバーたちのような能率の高さで、彼らは給油し、フロントガラスをきれいにふき、車中のごみを捨ててくれる。そして1人が車を車道へと誘導し、ガソリンスタンドを後にする車を皆そろってお辞儀しながら見送ってくれるのだ。それは交通渋滞の中に戻って行くまでのつかの間、休息しくつろげるありがたい時間を与えてくれるのである。

ひょっとすると日本の道路が抱える諸問題が実は日本にとって逆に長所でありうるのではないだろうか。もしもたえず日本政府が自動車旅行をより安く気軽なものにしようとするならば、多分もっと沢山の人が自家用車を使うにちがいない。となれば当然、道路は混雑し、環境汚染も一層進んでしまうだろう。だが日本は輸送体系を発達させるのにあたって世界でも指折りの鉄道網に投資をしてきた。だから日本の鉄道は速く、信頼できる。おそらく世界の他の国々が交通渋滞を深刻化させていく中で、日本の交通事情はより多くの人々をたくみに交通渋滞から回避させているのだろう。

学生生活だより ゼミナール紹介

赤井ゼミナール（言語文化を中心としたイギリス文化研究）

百瀬 恵

私たち赤井ゼミでは、イギリス文学・文化について研究しています。3年生は、THE English Studies Bookという英語のテキストを一人ひとり訳しながら読解していき、語学に関する様々な知識を身に付けていきます。語学力だけではなく、イギリスという国や文化、そして人々の本質などの理解を深めることが出来る授業内容です。

先生から渡されたイギリス文学の本を読み、イギリスについて理解したことをゼミ内でプレゼンテーションすることもあります。一冊の本を15分でまとめるというのはなかなかツライですが、プレゼンの力を付けられる良い機会でもあります。一人のプレゼンが終わる度にその内容について先生が詳しい説明をしてくれます。イギリスという国を知り尽くしている先生の説明は、本を読んで理解した以上のものを学ぶことが出来る大変興味深いものです。4年生は卒業論文作成のために個人指導を中心とした授業になります。

授業のペースは、必ず5分の休憩が一度あるので、ゆっくり学べる事が出来る良い環

境です。また、春学期に行われる4年生とのコンパは、普段なかなか話せない先輩と就職活動や将来について話すことの出来る、とても充実した一時です。

赤井先生は穏やかで優しくダンディーな方なので、私たちも和やかな雰囲気の中で勉強することが出来ます。このゼミの最大の魅力は赤井先生かもしれません (!!)

今まで知らなかった様々な知識が増えていくというのは、大変楽しいものです。英語の読解力を付けたい、あるいはイギリス文化を学びたいと思っている人は、赤井ゼミに入ってみてはいかがでしょうか。



嵐ゼミナール

鈴木 圭太

私たち「嵐ゼミ」は男女あわせて16名で活動しています。主にこのゼミでは日本語音声学に関することを勉強しているため、日本語を学ぶ留学生や日本語教師を目指す学生、方言研究や日本語研究に興味のある学生が多いです。活動内容として前期は意味を伝える文を読み書きできるようにすることを目標に、NHKアナウンサーの教本を使って正しい発音やナレーションの仕方について学びました。また、夏休みに大阪に行き大阪弁について研究しました。

後期は前期で学んだことを活かし、夏合宿で行った大阪についての紹介ビデオを作り、それにナレーションを加えました。そして今

は個人・グループに分かれて、「音声」をキーワードにビジネス日本語や日本語教育、各地域の方言研究、若者言葉や外来語の研究をしています。



学生生活だより **ゼミナール** 紹介

先ほども書いたように今年から発足したゼミなので先輩がいるわけではなく、ゼミ長としての活動も何もかもが初めてのことばかりだったので大変でしたが、みんなの協力のおかげで一年やってこられました。ゼミ生一人一人に個性があり、協力的な所がこのゼミの

良いところです。また先生と歳も近いので、良い意味で気を使わずに進路や講義のことなど、何でも相談できるのもこのゼミの良さだと思います。

みんな良いやつなんで興味があつたらうちのゼミを一回のぞいてみてください！

伊藤ゼミナール

佐久間 剛

私たち伊藤ゼミナールは、4年生10名、3年生8名、計18名で構成されています。

主な授業内容は、卒業論文の研究発表に加えて、映画翻訳の練習、基本文法の復習などに取り組んでいます。卒業論文は、私たち大学生にとって大学生活のメインとなる課題です。伊藤ゼミでは各自が自由にテーマを設定できるので、それぞれが自分の興味のあることを自由に研究でき、また他の人の研究発表を聞き、それについて全員で質問を含めた討論をするので、自分の知識を増やすための場ともなっています。

伊藤先生は厳しい一面もありますが、明るく優しく、何よりも私たち学生を信頼し、学生主体の授業を行って下さいます。研究にまずき、先生に相談に伺うと、一緒に考え、的確なアドバイスを下さいます。

ゼミ生は、両学年の学生みんな仲が良く、とてもいい環境で活動しています。ゼミのモットーは、「よく遊び、よく学べ」なので、授業中はお互いに刺激しあい、授業以外の時でも交流が盛んです。



毎年夏には恒例の合宿があり、今年は3泊4日で伊豆高原へ行ってきました。メインは研究発表なのですが、勉強は午前と夜のみで午後は自由時間となり、効率よく勉強することができました。自由時間には観光、施設でのスポーツなどとても楽しく過ごし、普段できない話や行動を共にしたことで一層信頼を深めることができました。

私たちは、伊藤ゼミの活動を通じて全員が将来への目的を持ち、勉強と共に人間性も成長できたらいいと思っています。

稲垣ゼミナール (英語学・英語教育)

並木 雄司

私たち、稲垣ゼミはできてから3年しか経っていないとても新しいゼミです。10数名で活動している少人数ゼミなのでみんながとても仲がよく、充実したゼミ生活を送ることができています。

毎週火曜日にある本ゼミでは主に「英語学」について研究しています。一人一人がそ

れぞれ自分の興味のある英語に関する研究をすすめ、さらにそれをみんなの前で発表しています。自分が研究したことをみんなにわかりやすく説明するには、かなりの努力と勉強が必要です。また自分たちの発表に対して厳しい意見も仲間が出してくれるので、自分の研究テーマがより深まり、内容が豊かにな



ります。同時に質問する側も批判的に物事を考える力がつきます。

さらに、稲垣ゼミでは毎週水曜日にサブゼミというものを行っています。内容は本ゼミとは異なり、TOEICの問題演習をやっています。730点以上を目標にみんなでがんばっているの辛い勉強も苦になりません。実際にゼミ生の中ですでに100点以上も点数が伸びた人が何人もいます。

夏休みにはゼミ生で2泊3日の箱根合宿に

も行ってきました。そこでは勉強以外にもゼミ生と交流を深めることができ、大変貴重な経験をすることができました。

最近では杏園祭にて、ゼミ対抗のプレゼンテーションコンテストに参加しました。このコンテストでも「日本語の発想と英語の発想の違い」といった大変面白みのあるプレゼンテーションに挑戦しました。コンテスト前日までゼミ生で夜遅くまで学校に残ってプレゼンテーションを完成させたのは記憶に新しく、達成感もありました。

稲垣ゼミの良いところは、学生の自主性にあります。学生が主体的に活動していかなければいけないため、大変なことは多々あります。しかし、そんな時は稲垣教授が状況に応じて、私たちに手をさしのべてくれます。自分から何か行動を起こしたい人にとって、稲垣ゼミは本当に充実した生活を送れるところだと思います。楽しい学生、頼りになる教授、そして明るい生活が稲垣ゼミには待っています。

今泉ゼミナール（日本語文法研究）

林 孝眞（イム・ヒョジン）

「日本語文法に自信がありますか?」「はい。自信があります。」と答えられるぐらい今泉ゼミでは、日本語の文法を研究しています。今まで、気付かずに使ってきた間違った日本語や疑問を持っていた日本語の文法が数学の方程式が解かれるように明らかになっていく楽しみがあるゼミです。今泉先生はいろんな国で日本語を教えてきた経験をふまえて私たちにいつも嘸んで含めるように日本語の文法を教えてください。それから、日本、中国、台湾、モンゴル、韓国出身の私たちは自分が勉強してきた日本語や文法などをお互いにコミュニケーションしながら日本語だけではなく相手の文化や言語も学び、友情も重ねています。小さなグローバル社会を連想させます（笑）。今年、杏園祭のときは学生の皆さんや杏園祭においでになったお客様が自分の日本語文法力を測定してみる部屋を設けま



した。予想したよりずっと多くのお客様が参加してくれたので驚きましたが、一方では微笑ましかったです。私たちはお客様の日本語文法力の測定ができるように案内しながら、質問とかあった場合には、学んできた日本語文法の実力を心残りなく発揮しました。胸がいっぱいになる瞬間でした。あと、卒業まで1年となりました。短い時間かもしれませんが、これからも頑張りたいと思います。「知る楽しみ」がある今泉ゼミだと思います。

岩崎ゼミナール

松山 夏季

私たち岩崎ゼミナールでは、杏林大学が存在する八王子に軸足を置き、他地域から良い点を学び、学生の視点からどのように八王子の発展に活かすことができるのかをテーマに活動しています。ゼミの時間は男女18人が集まり、岩崎先生の体験談などを聞きながら、真剣な眼差しで意見を出し合いとても充実しています。

また、月に一度の教室外活動も行っており、行き先はゼミ生が自分達で意見を出し合い決めています。今年も、高尾山、八王子城址、川越、鎌倉、八王子祭りなどへ足を運びました。教室の中だけでなく、外に出て自らの目で確かめ、感じることで視野を広げることへとつながっています。そして、年間行事の中で最も力を注ぐ杏園祭への展示にむけて、今年も商店街をテーマに掲げ、比較対象に川越を選びました。合宿や繰り返しの調査を重ね、意見のぶつかり合いを乗り越えての展示発表でしたが、自分を見つめ直し、お互いを知り、ゼミ生が成長できる機会となりました。

さらに、八王子2大祭りのひとつでもあ



る、「いちょう祭り」へゼミとして2回目の参加をいたしました。今回はけんちん汁屋台での出店となりましたが、市民の方々との交流が図れた、心に残る経験となりました。

その他、岩崎ゼミナールではイベントも多く、和気あいあいと笑顔の絶えない楽しいゼミです。具体的には懇親合宿を初め、年に5回ほどの飲み会など、先輩後輩の交流も頻繁に行われています。この先も、岩崎先生と18人全員で沢山の思い出を作っていきたいです。

江戸ゼミナール

飯岡 優美

私達江戸ゼミナールは、現在、4年生3名で活動しています。昨年までは4名で活動していましたが、メンバーの1人が産休のため、更に少人数になり寂しくなっていました。

江戸ゼミナールでは、オセアニア地域圏研究などの授業をされている江戸先生のもと、オーストラリア先住民のアボリジニについて学んでいます。3年生の頃は、アボリジニの文化・歴史に関する書物を読み、それらを自分の言葉でまとめて発表しました。4年生の今の時期は、各自が興味を持った分野の研究をし、卒論の完成を目指して執筆活動をして



います。これがゼミの主な活動内容です。

江戸先生は、とてもパワフルで物事をはっきりとおっしゃる方です。発表の際にも、日

本語の言い回しや文法等におかしいところがあると指摘し、修正してくれます。このように、江戸ゼミでは、オセアニア地域に関する事だけではなく、英語はもちろん日本語の表現についても学ぶ事が出来るのです。

江戸ゼミでは、懇親会と題して、食事会を行います。先日も皆で、中華料理のバイキングに行き、楽しく美味しいひと時を過ごす事

が出来ました。また、夏休みにはゼミ合宿を行います。今年は静岡県内の御殿場に行き、御胎内公園の中にある洞窟に行ったり、金時山へ登山に行きました。天候にも恵まれ、山頂からの景色はとても綺麗でした。ゼミ合宿では、とても充実した時間を送る事が出来ました。

木崎ゼミナール 『優しい心を持つ人に……そしてホスピタリティを求めて』

太田 直徹

みなさん、こんにちは！木崎ゼミナール・ゼミ長の太田直徹と申します。

この誌面をお借りして、私たち木崎ゼミナールについて紹介させていただきます。

私たちは「優しい心を持つ人間になろう」を合言葉に、主にサービス業での“ホスピタリティ（親切なおもてなしの心）”について研究しています。

下の写真をご覧ください。我がゼミは‘1期生4人’‘2期生25人’の総勢29人で構成されています。一目でお解かりの通り、圧倒的に女子が多く男子は先生を含めても7名です。去年の秋から発足しているので、まだまだ歴史は浅いのですが、一人ひとりが与えられた役割をしっかりとこなし、グループで行った企業研究、夏季合宿や杏園祭も成功をおさめることができました。私たちが木崎ゼ

ミナールの大きな第一歩となるべく、全員が明るく元気で活発に活動しています。

次に、普段のゼミでの活動について少し詳しく説明します。私たち2期生は、5人1組で5つのグループに別れ、それぞれのグループが一般企業のサービス面などを研究し、実際に企業を訪問し取材を行いました。その結果を毎週ゼミの中で発表してきました。5つのグループとは、①エアライン産業②宿泊産業③テーマパーク産業④外食産業⑤医療・小売産業の5つで、それぞれ、日本航空や東京ディズニーリゾートなど数々の企業を研究しました。

どの企業も、ほぼ私たち自身で直接アポイントメントを取り、取材を行いました。うまくいかない事もありましたが、この経験は私たちにとって何ものにも変えがたい貴重な体験になりました。

来年には新たなメンバー22名を加えた総勢51名の大所帯になる予定です。これからは先輩としてだけではなく、一人の成人としてもますます成長していくつもりです。

ゼミナールでの活動が一生の思い出となり、このメンバーが一生の仲間になればと思いながら、ゼミ生一同一致団結し、元気に活動していきます。

どうぞよろしくお願い致します。



29人全員集合!! 2列目左端が先生。最後列で1番背の高いのが筆者です。

楠家ゼミナール

楠家 重敏

楠家ゼミナールは大所帯のゼミです。とても広い範囲のテーマを扱っています。私の出発点は日本近現代史であり、大学時代の卒業論文は「外国人の見た文明開化」でした。世間的には歴史家として知られています。

12年前に杏林大学に着任してから、英語と比較文化論を教えることになりました。英語はあまり得意ではありませんが、外国に行くことはとても好きです。イギリス、スイス、フランス、アメリカ、カナダ、シンガポール、韓国に行ってきました。とりわけイギリスにはもう30回以上滞在しました。ロンドン、オックスフォードなどイギリスのいたるところを見てきましたので、その国の大きな街はほとんど知っています。ある年には明治初年の岩倉使節団のイギリスでの滞在地を出来る限り訪ねてみました。こうした体験をもとに比較文化論の授業をしていますが、ゼミでもその体験を語っています。

著作はかなりありますが、主として日本と外国の関係史を世に問うてきました。日本と外国の文化交流史、外国人の日本見聞記、日

本人の外国体験、そしてイギリス人の日本研究が私の専門テーマです。とくに19世紀の外国人が日本をどのように理解したかを調べています。チェンバレン、アストン、サトウといった名前を並べても、たいていの方はご存知ないようです。研究というものはまだ人が知らないものをやることに価値があるのですから、これは致し方ありません。現在は「日英関係史」を執筆中で、数年後に本にするつもりです。今年度のゼミナールでは、その原稿を使用して江戸時代の日本とイギリスの交流史を論じています。

そういう訳でゼミでは学生の広い要望になるべく応えられるよう努力しています。商売柄読書はたくさんしていますが、大学生時代には新書本を200冊読破しました。私自身とても好奇心旺盛なので、今の学生のやることを興味深く観察しています。今年ゼミの学生と2回コンパをしました。近いうちに学生とカラオケ（レパートリーは300曲以上）に行くことを楽しみにしています。

熊谷ゼミナール（情報社会の社会問題—日米比較を中心に）

村上 絢・増田 晋平

前期にはアメリカで出版された「Taking Sides」（社会問題を扱ったディベートの教科書）を読む。これによってアメリカの社会問題を理解し、論理的思考法、自分の意見をまとめる力が養われる。また、この教科書を読破することで忍耐力もつく。

後期には英語で約一時間のパワーポイント・プレゼンをする。テーマは各々興味のある業界や社会問題である。そのテーマについて深く理解することは勿論、英語運用能力の向上、効果的なプレゼン法も身につく。準備は大変である。しかし、プレゼンをやり終えた瞬間の達成感、体験した者しか味わえない。また毎週、時事問題を日本語で考えるク

リティークの訓練も行う。

ゼミ合宿は春と夏の年二回行う。夏合宿は静岡の由緒ある禅寺で行う。座禅、法話を体験し、日常生活で忘れかけていた日本の心を取り戻すことができる。



熊谷ゼミナールでは、ゼミ・ブログ(KSB)を作成している。毎週の授業内容、課題、プレゼンのコメントなどは英語で、またクリティークは日本語で掲載している。加えて、毎週のゼミナール終了後の写真、合宿、折々の行事で撮影した写真は、KSB フォトアルバムに掲載している。

・ KSB : http://blog.livedoor.jp/fk_seminar/

- ・ KSB Photo Album : http://ksb.cocolog-nifty.com/photos/ksb_photo/
- ・ Fumie Kumagai HP : http://web.sfc.keio.ac.jp/~n_96287_fk/

熊谷ゼミナールで培った多くの力は、社会に出てからも大いに役に立つ。私たちは自信を持って言える。「私たちは熊谷ゼミナールで成長した」と。

黒田ゼミナール

黒田ゼミナール一同

私たち黒田ゼミナールは4年生8名と3年生15名で構成されていて、主にアメリカ文化や文学について学んでいます。3年生ではアメリカ文化についての全般的な知識を身につけるために The American Ways という洋書をテキストとして、それを和訳・分析してアメリカ文化に対する興味を深めています。4年生になると、3年生の時に培った興味や知識をもとに卒業論文執筆の準備を始めます。

また、就職に備えて各自 TOEIC の受験や英検の取得にも取り組んでいます。この他に、4月には4年生主催の懇親会、夏休みには3・4年生共同の合宿を箱根で行い、各自研究発表をしました。また、秋の杏園祭では、例年の模擬店の出店に加えて、今年は初めてプレゼンテーション・コンテストにも参加をして、貴重な経験を積むことができました。



た。ゼミ生の興味は、アメリカの人種問題や移民問題、軍事力や戦争について、9.11についての考察、スポーツ・音楽・映画、食文化とファーストフードや肥満問題など多岐にわたりますが、お互いに刺激を受け、皆でさらに成長していけたらよいと思います。

小山ゼミナール (東アジア研究)

石森 綾

このゼミナールは主にアジア圏の国々の異文化などを、有名な書物を元に学んでいます。今年は、前期に森三樹三郎著の『名と恥の文化』を元に中国の文化を、後期には鈴木孝夫著の『ことばと文化』を元に人の内側に存在する国の文化を学びました。授業は円卓で会話によって行われます。班を組み、意見交換を行い、その班ごとに発表するというのが主な流れです。日本人の学生は留学生に日



学生生活だより **ゼミナール紹介**

本語を教えることもしばしばあるでしょう。

そして特徴的なのは、様々な国出身の人が集まっていることです。今現在は、日本・中国・台湾の国の人が所属しています。

飲み会も恒例行事のひとつです。交流することによって、普段授業中に学ぶような異文

化を肌身で感じることができるのです。このように小山ゼミナールは、授業による学びのほかに実際に多国籍の人と交わす交流によって、異文化を学べる魅力的なゼミであると思います。

諏訪内ゼミナール（国際理解教育）

諏訪内 敬司



18年度まで世界的名著『武士道—日本の魂—』の著者で、大正時代から昭和時代にかけて国際連盟事務局次長を務めた「新渡戸稲造」をゼミの研究テーマに掲げていたが、外国語学部3学科制度開設に合わせて来年度からテーマを、「国際理解教育」に変更する。

21世紀に入り、人、物、金、情報が国境を越えて行きかう傾向がますます強くなっている。いわゆる「国際化時代」に突入したと言っても過言ではない。特に、先進国の一員である日本ではその傾向が強いが、日本の学校教育ではそれについての十分な対策が立てられているとは言いがたい。仕事を求めて日本に入国する外国人およびその家族、学問や

日本・日本語について学ぶために来日する留学生を町でかなり見かける。逆に、日本企業が人件費や諸経費の安い途上国に生産拠点を移転するのに伴い、従業員やその家族を海外赴任させたり、学生や生徒が国外の大学や語学学校などに留学する。それらの接点で、民族的・歴史的・文化的・宗教的背景の違う人々との出会いがある。外国で暮らすには、現地の言語を習得するだけでは十分ではない。異文化適応という大きな課題が横たわっている。異文化をどのように受け入れ、接していけばよいのか、外国人・異文化に対してどのように溶け込んでいけばいいのか。異文化適応に成功しなければ、外国人との交流はうまくいかない。異文化理解・異文化適応・異文化共生が国際化時代の課題である。

移民から成る多文化国家アメリカ、難民・移民を多く抱える欧米諸国での国際理解教育はどのように行われているのか。これらの事例から日本が学ぶ点はあるか。日本ではどのような試みがなされているのか。理論的研究と同時に、実践事例をも視野に入れて学んでいきたい。

詹ゼミナール

鈴木 豪

詹ゼミは古き良き中国の古典、漢文について勉強しています。

授業では、漢文界で知らない人はいないと言われる杜甫や李白の漢詩はもちろん、あまり知られていないような漢詩についても扱っ

ており、中国の古典について多くを学ぶことが出来ます。

授業は先生を中心として進められていき、たまに調べてきた漢文の発表や中国語の勉強もします。もし分からない所があったとして

も、分かるまで先生が教えてくれますので、漢文は初歩的なことしか分からない・興味はあるけど授業についていけるか心配だ、という人でも楽しみながら漢文について学ぶことが出来ます。

ゼミ行事としては、6月に神田の本屋街へ古い漢文の本や中国の本・御茶ノ水にある古いお寺（湯島聖堂など）を見に行き、11月には食事会、2月には4年生追い出しコンパがあり、勉強以外の息抜きも所々で用意されています。

そして詹ゼミの一番紹介したい所は、やはり先生の人柄です。先生はとても明るくて優しく、授業中はゼミ生・先生の笑い声が絶えません。先生は時には厳しいけれど、ゼミ生の相談に親身になってのってくれます。先生の人柄のおかげか、ゼミ生はみんな明るく、



真面目に勉強しています。

今の時代は新しい物へ新しい物へと流れて行きますが、こんな時代だからこそ昔の人達の作った文化や考えは学ぶことも多く、それらを勉強するのはとても大切なことです。

もし中国の古典・漢文に興味がある、という人は是非一度詹ゼミに見学しに来て下さい。先生・ゼミ生一同、歓迎します！

高木ゼミナール

小林 加奈

高木ゼミナールには、「3、4年生合同で活動する時間」と「3年生中心で活動する時間」があります。

3、4年生合同の時間は、主に卒業論文の中間発表を行っています。私たちは、各自が自分の興味のあるテーマについて研究に取り組んでいるので、定期的に、その内容や途中経過を他のゼミ生に披露します。発表では、人前で話す緊張感の中で、「自分の研究成果をいかにみんなに分かり易く伝えるか」、「質疑応答でどのように対応するか」が、ポイントとなります。私達は、これらのことを踏まえながら、プレゼンテーション能力を鍛えています。さらに、発表にはパワーポイントやハンドアウトを使用するので、パワーポイントの使い方やハンドアウトの作り方も自然と学ぶことができます。3、4年生合同の授業は、今年から始まった試みですが、学年を越えた交流ができるだけでなく、お互いの良い面を発見し、吸収できるいい機会となっています。

3年生中心の時間は、1つの議題に対する

考えを一人ひとりが持ち、それを代表者が発表し、みんなでディスカッションしていくという形をとっています。ここでも、人前で堂々と自分の意見を主張するプレゼンテーション能力を磨いています。そして、自分の意見を述べるだけでなく、人の意見も聞き、様々な角度から問題を見つめ、考えを煮詰めていきます。この時間を通して、3年生同士の団結も図られています。

高木ゼミでは、プレゼンテーション能力の向上のみならず、英語力の向上にも力を注いでいます。そのために、ゼミの枠を越えて、



学生生活だより **ゼミナール紹介**

英語力を伸ばしたい者たちが集まって、主に TOEIC の勉強をしています。

高木ゼミは、みんな個性が豊かですが、ま

とまる時はまとまるし、やる時はやります!!
そして、みんなが本音を言い合えるとてもいい雰囲気のゼミ作りをしています。

田中ゼミナール (英語力強化と国際英語研究)

田中ゼミナールでは、将来英語教育に携わろうとする者や英語力を仕事の場で活かそうと志している者を対象に、英語運用能力を強化して自分の意見を正確に英語で表現できるようになるための徹底的な訓練を行い、さらに、「国際英語」の問題を主に英語教育・社会言語学の観点から考えていくことをテーマとしています。

正しい発音での徹底的な英文音読練習を中心にスピーキング力アップのための特訓を行います。この際、個々の音やイントネーションの点から徹底的な発音矯正を行っています。

理論面では、近年活発な議論が世界中で展開されている「国際英語」について多くの文献を読み、さらに、実際に世界で話されてい



るさまざまな地域の英語を聞きながら、今後日本人が目指すべき第二言語としての英語はどのようなものかを考えていきます。

夏には英語力をのばすための勉強のしかたを学んで実践する英語力強化合宿を行っています。

玉村ゼミナール

玉村ゼミ JEC 執筆班

玉村先生のゼミでは、日本語の語彙・意味全般について研究しています。先生は現代日本語の語彙だけでなく、過去から現代に至る日本語の語彙・意味の変化について幅広く研究されています。ですから、先生のゼミで勉強しているうちに、私たちゼミ生は普段なにげなく使っている日本語について疑問をもったり関心をもったりするようになりました。それは日本語観察力、日本語分析力が鍛えられているという証でしょう。

先生は優しく楽しい人ですが、学問にはとても厳しいですから、ゼミでは真面目に勉強しています。

今まで知らなかったことを知った時、気付かなかったことにはじめて気付いた時、発見をした時、それはそれはとても幸福な気持ち

になります。

本当の勉強ってこういうものなのかということを知って、少し大きさに聞こえるかもしれませんが、学問が好きになりました。つま



ゼミの懇親会

り充実した学生生活を過ごしているということです。

先生は、京都のご出身ということもあり、京都について私たちが尋ねれば、親切に教えて下さいます。うわさによると、先祖代々、京都だそうで、だから生粋の京都っ子ということになります。あの雅な京ことばがお使いになれるのです。テレビ・ラジオで聞く「京ことば」より先生の方が由緒正しき京ことばを話されます。私たちゼミ生はいつか京都に行って御所・金閣寺・銀閣寺・清水寺・二条

城などを見学して日本文化の原点に触れたいなと思っています。ゼミ生の中には、さらに平等院・陽明文庫・冷泉家などにも行って、藤原道長や藤原定家などに関わることにしても知識を深めたいと考えている人もいます。

このゼミには、日本人もいれば留学生もいて、また日本語教員や国語教員を志す人もいればそうでない人もいて様々ですが、それがまたいいですね。みんな仲良く楽しく勉学に励んでいます。



千野ゼミナール

齋藤 踊子

私たち千野ゼミナールは開講して1年目の、出来たてのゼミです。メンバーは3年生が3名のみという、ごく少人数で活動をしています。主な活動内容は中国語読解訓練であり、中国の文字改革が行われ「漢字簡化方案」が制定された当時のことを綴った原文を読み解き理解を深めると同時に、中国語の読解・発音能力を養うことを目標としています。文字改革とは、それ以前中国で使用されていた難しい字の繁体字を簡略化し、簡体字として制定し統一しようといわれた改革です。一切手の加わっていない中国語の原文を読むのは一苦勞ですが、これにより読解力が磨かれ、文字改革に関連する知識も身につけ

ることが出来ます。また、もうひとつの大きな活動として、卒業論文を制作するにあたり、個々が研究テーマを決めてそれをどう形にしていけるかを、千野先生にご指導頂きながら検討しています。テーマに関しては、本格的に研究に入る前に自身がどんな内容で、何を調べ、どのようにまとめたのかを全員の前で発表します。そして先生や周りからのアドバイスをもらった上で、研究を進めていこうという方針です。

ゼミの活動場所は先生の研究室です。活動人数が先生を加え4人のため、空間的にも丁度良くアットホームな雰囲気です。時に雑談をし、時に中国の古い書籍や資料を引っ張り出しそれらに興味を向けてしまうなど脱線は多々あるものの、文字改革を読んで考察し、先生の解説に耳を傾けている時の皆の集中力は半端ではありません。ここで培われたものが卒論を書く上での大切な糧となり、大きく役立ってくるでしょう。

最後になりますが、これを読んで少しでも、私たち千野ゼミナールに興味を持って頂けたなら幸いです。これから学問に際し活動的なゼミでありたいと思います。



ここでは、実際の小学生に接する機会を頂き、英語の歌やゲームに触れてもらい、共に楽しい時を過ごすことができました。

私たちは、豊田先生をはじめ、私たちに活動の場を提供して下さる方々のおかげで、貴

重な経験を通して、学習を積み重ねています。ゼミの活動は全体的に一貫しており、語学教育に関心のある私たちゼミ生にとって、授業の内容はとても興味深く、有意義な活動を送っています。

鳥尾ゼミナール

「観光…それは光を観ること」、私達はこの鳥尾先生の一言に何かを感じ、鳥尾ゼミナール7期生となりました。

私達は「観光産業・インバウンドツーリズム」を研究テーマとしています。観光とは何か？観光はどのような効果をもたらしているのだろうか？観光の「光」を研究しています。

今年の夏、私達は大阪に合宿に行きました。「観光＝価値消費」を基に、私達も大阪の「光」を実際に体験しに行きました。前日の夜中に夜行バスで出発し、京都入り。そのまま朝の京都を散策し、お茶で有名な大徳寺に行き、そこの住職さんに有難いお話を聞くことができました。大阪では下町ツアーに参加し商店街のおばちゃん達と実際に会話したり、大阪の新宿とも言われている難波を満喫。最終日には名古屋の中部国際空港へ見学に行きました。

観光とは「時間価値」と「体験価値」。私達も実際に大阪を体験し、今までの先生の話と繋がった、改めて理解できたことがたくさんありました。

10月の杏園祭で研究の成果を発表するとなった時、私達が見てきた大阪の「光」を来て頂いた方にも私達と同じように体験して頂きたいと思い、教室そのものを大阪の道頓堀に仕上げました。毎晩夜10時近くまで残って作業する程大掛かりな作業でした。その結果、来て頂いた方々からお褒めの言葉を頂いた時の喜び、何よりも鳥尾先生を始め、みんなで1つの大作を完成した時の達成感は大変大きなものでした。

鳥尾ゼミでは観光産業以外に、もうひとつ

大切なものを学んでいます。それは「人間」です。ホスピタリティ（おもてなしの心）だけではなく、「仲間」を尊重し大切に思うこと。うわべではなく、心の底からです。ディスカッションの際、仲間の発言に対して気を遣って反論しないことは、尊重しているとも大切にしているとも言えません。「本当に仲間のことを思うのならば遠慮はいらない。」と鳥尾先生は教えてくださいました。

「仲間」とは同学年のゼミ生のことだけではなく、素晴らしい伝統を残してくれた先輩達のことでもあります。その伝統（鳥尾ゼミナールDNA）とは以下のものです。

私たちは以下のことをこころがけます。

1. 私たちは自主的に行動します。
2. 私たちは自助的に行動します。
3. 私たちは自発的に行動します。
4. 私たちは大人という自覚を持ちます。
5. 私たちは後輩を大切にします。
6. 私たちは観光と人間を学びます。
7. 私たちはメリハリのある生活をします。
8. 私たちは夢を持ちます。
9. 私たちは光を観ています。
10. 私たちは自分を大切にします。
11. 私たちは信念を持って行動します。
12. 私たちは五本締めを行います。

1. 2. 3. は鳥尾ゼミが特に大切にしている「3J」と呼んでいるものです。先程の文面は鳥尾先生が作ったものではなく、私達の「仲間」である5期生の先輩が自主的に作ったものです。

確かにゼミでは何かをテーマに「研究」を

学生生活だより **ゼミナール紹介**

する場ですが、「成長」をする場だとも思っています。また私達は伝統を受け継ぎ、鳥尾

先生のお教えのもと「観光を学ぶひとりの人間」として成長できると信じています。

中村ゼミナール（ゼミで禅に触れて）

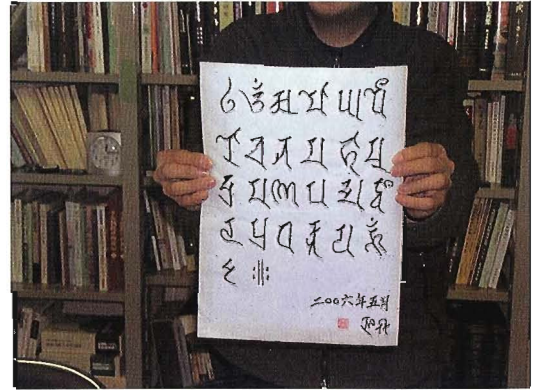
山田 智康

ちょうどこの原稿を書いているのが12月の初めである。釈迦が苦行の後に森を出て沐浴し、村の娘から牛乳粥をもらって食べ、旧暦の12月8日に悟りを得たとされる。この日にちなんで中国では粥を食べる習慣があった、その粥を臘八粥^{ろうはちがゆ}と言う。

私達、中村ゼミでは主に禅などに関する近代漢語の資料を読み仏教用語についても勉強している。春学期は『百喻経』について学んだ。『百喻経』とは、98のそれぞれ独立した喩え話からなる。その内容は愚かな人物の描写を通して私たちに正しい道理とは何かを教えてくれる。原文は現代中国語とは異なり全て文語体で書かれているので読むのになかなか骨が折れるのだが内容が何といても奥深く非常におもしろい。私は毎回なるほどと感心させられるばかりである。

また仏教用語についてもインドから中国に入ってきた時に音訳されたものが多々ある。たとえば涅槃という言葉があるが、これはサンスクリット語のニルヴァーナの音訳であり意味は煩惱の炎が吹き消された状態を指している。この様なことも学ぶことができるのも中村ゼミならではである。

このサンスクリット語を表すのが梵字のだが私は何故かゼミで勉強をしているうちに



梵字にはまった山田君の字

梵字の魅力に惹かれてしまい最終的に梵字の手本をもとに書写の勉強をしてしまうまでになってしまった。梵字を書くと思議と心が落ち着くのである。先生からはその時、梵字の知識について教えていただいた。また仏像について興味を湧いた時は国立博物館で仏教に関する展示や催し物に足を運んだりした。その時も次の週にその内容についても中村先生から解説してくださり自分の知りたいことをより深く知ることができた。

このようにゼミ生それぞれの興味や学びたい内容を尊重しつつ指導していただける。物事の本質とは何かを見極めることを学ぶことができる充実したゼミだと感じる。

野口ゼミナール

1. 担当教員よりご挨拶（写真中央）

2006年4月に始まったばかりの野口ゼミナールでは、台湾からの2人の女子留学生在が充実した時間を過ごしてきました。旅行業をめぐる勉強はもちろんのこと、大学内外での生活についていろいろと相談するような機会になっています。

ゼミの時間が始まると、まず2人がこの1週間の出来事を報告します。普段の授業のこと、一人暮らしの中で起きる問題、就職活動などについて話します。それが一通り済んでから、勉強の部分に入っています。

ゼミ以外の時間では、電子メールを使って連絡を取り合っています。大学生活の中心と



してのゼミ活動には教員と学生の緊密な関係が大切です。

今年の野口ゼミナールがどんなゼミだったのか、このお2人からご紹介いただきます。

2. 林 始 屏 (写真左)

野口ゼミは、旅行業のインターネット・マーケティングを中心に、「日本（東京）観光に対する外国人（台湾人）の意識に関する調査」や「女性に向け八王子の魅力を発見」などをやっています。

うちのゼミの特色には、研究テーマの結果についてあらかじめいろいろと予想してから資料を集める方を決めます。ですから、これまでアンケート調査を実施して、エクセルに入力した資料を分析しています。旅行業に関するさまざまな展開について、勉強することができるゼミです。

3. 陳 淳 皿 (写真右)

野口ゼミには台湾から来た留学生2人しかいませんが、いろいろな活動に参加しました。7月に古本ゼミの方と一緒に大阪に行って合宿して、学園祭の時にも台湾風の焼きビーフンを作りました。とても充実して楽しかったと思います。

私たちの研究テーマは「東京に来る台湾の若い女性の動機と消費行動」です。台湾からのお客さんがだんだん増えて来たため、お客さんのニーズも重視しなければならないからです。また、調査分析によって新しい八王子観光の魅力を発見して、外国人観光客を増やすことを目標にしています。

長谷川ゼミナール

長谷川弘子プラスゼミ生

授業中は、各自が自分のテーマについて調べてきたことを発表し、皆で質問や討論をすることを主に行っています。今年は、前期のテーマは「ドイツの歴史や文化、社会についての考察のほか、主要な都市、行ってみたい観光名所などを見つけ、その地域の成り立ち、名産、建築、習俗などさまざまな情報を調べてレポートを作成する」でした。前期に調べたことは、ポスターにまとめて、杏園祭で展示しました。後期にはいつてからは、各自が好きなテーマを自由に設定して研究しています。おせっかい、世界遺跡マチュピチュ、アロマテラピーの歴史、日本の犬、日本のサッカー、グリム童話などなど、バラエティに富んだテーマ設定になっています。学期末には、パワーポイントを用いて発表を行う予定です。

平成19年度からは「色彩」を共通テーマにして、各自が「色彩に関する、自分の研究テーマ」を見つけて研究する予定です。色彩検定の準備勉強も行います。

最後にゼミ生からの言葉を載せます。「ゼミコンパについて…私たちのゼミのコンパ



学生生活だより ゼミナール紹介

は、回数は多くないけれども毎回とても盛り上がり、とても楽しいです。お酒を飲まなくても楽しいです。」

「自由奔放で、破天荒な学生諸君をあい、みごとに、まとめ上げている姿は、尊敬

に値する。」(担当教員に対するおほめの言葉です。)

「文章力やまとめる力をつける機会にもってこいです。力をつけたい人は是非、長谷川ゼミへどうぞ！」

原田ゼミナール

石黒・松本

私たち原田ゼミナールでは、イギリス文学を中心として勉強しています。現在ゼミ生は4年生21名、3年生11名です。通常の授業では英文の教科書を使い、順番に訳しながら発表していく形で進めています。教科書の内容はイギリス文学史が主ですが、そのイギリス文学を通して当時の世界情勢や社会・環境といったものも学ぶことができます。

卒業論文はイギリスに関する事柄で自分が興味のあることについて書き上げます。その卒業論文をより完成度の高いものにするために、春・夏の研究発表合宿が行われます。合宿では各自が研究したことをプレゼンテーションという形で発表し、先生や先輩方の意見を聞くことによってより良い研究を進めることができます。また、夏合宿は3・4年合同で行うため先輩方との交流も出来、就職活動などに関しても情報交換することが出来ます。

現在4年生は卒業論文の仕上げに励み奮闘しています。3年生は本格的に就職活動も始



まる中、春合宿に向けて研究を進めています。

ゼミ時間以外にも学期ごとに親睦会があり、普段のゼミではなかなか聞けない先生の話や、先輩方との交流を深めることが出来ます。

パロケッティゼミナール

森川 貴則

私たちパロケッティゼミナールは、現在男子6名・女子5名の、計11名で活動しています。ポップカルチャーをメインテーマとし、日本を含めた様々な国の文化について研究しています。文化の研究といっても、特別難しいことをしているわけではありません。例えば、夏季休暇時には、各自で興味のある博物館や美術館を見に行き、パワーポイントにまとめて発表会をおこないました。その中に

は、おもちゃの博物館・サッカーの博物館・トリックアートの博物館など面白いものがたくさんありました。そして最近では、ブロードウェイミュージカル・チャイニーズオペラ・歌舞伎についてグループに分かれて研究し、発表しました。発表を終えてみて、私たちは日本人でありながら、日本文化である歌舞伎についてすら知らないことが数多くあることにも気づかされ、大変興味深い研究とな



りました。今後の大きな予定としては、教授とメンバー全員で、実際に歌舞伎を見に行くことになっています。歌舞伎を見に行く機会など普段ないことですから、メンバー全員に

とって貴重な経験になることと思います。

また、パロケッティ教授のもと、授業はもちろん英語のみです。そのため、様々な国の文化を学ぶだけでなく、語学力も身につきます。

ここまで研究、研究と堅い話をすすめてきましたが、メンバー同士の仲を深める意味もこめたバーベキューや夏の合宿等の楽しいイベントもおこなっています。そして、学園祭ではメンバー全員で協力して、じゃがバターを出店しました。これらのイベントにより、メンバー間の信頼関係や団結力を築くことができたと思います。

今後も様々な活動を通して多くのことをメンバー全員で頑張っていきたいです。



古本ゼミナール

藤嶋 健太郎



私達、古本ゼミは観光系のゼミの中では新しいゼミで、今の3年生で2期生になります。現

在4年生が11名で3年生が21名です。留学生も多数在籍しています。また、先輩後輩といった壁がなく3年、4年生と仲良く自由な雰囲気です。3年生と4年生の授業は別ですが、課外授業などでは一緒に活動します。

ゼミの活動内容は個人研究とグループワークの2つを行います。私達のゼミは個人の興味を大切にしているので、いきなり課題を出されやるわけではなく、自分の興味のあることについてからの研究が始まります。その方法として、まず、観光をテーマとした自分の興味のあることについての本を探し、その本についてのどのようなことが書いてあるか、またどの部分に興味を持ったかゼミの中で発表します。その発表の中でプレゼンテーションの基礎、パソコンソフトのワードやパワーポ

イントの使い方も実践的に学んでいます。最初は大変ですが、徐々に慣れていくところですが、そしてその発表を発展させ、卒論につなげてゆきます。グループワークはテーマを自分たちで決め、来年度の杏園祭で発表予定です。

その他の活動としては、フィールドワーク（現地調査）があります。ゼミ生全員で行ったのは、八王子市が主催する「八王子学」という研究の一環で、八王子市を観光の視点から多角的に研究するといった内容でした。私たち古本ゼミは歴史と地場産業をテーマとした1日観光ルートを作成し、これを杏園祭で発表展示しました。「八王子学」研究以外に野口ゼミと合同で焼きビーフンの屋台も出しました。そのほかに数名のゼミ生で葛飾区の観光政策を考えるためのフィールドワークにも、他大学の学生と一緒に参加しました。

私たちのゼミは、夏と冬にゼミ合宿があります。冬は二泊三日で群馬県新治村での研究発表と、たくみの里体験見学を行いました。夏は二泊三日で関西方面へ行きました。初日は京都市内観光、2日目はユニバーサル・スタジオ・ジャパンとUSJのオフィシャルホ

学生生活だより **ゼミナール紹介**

テル見学で、3日目は大阪市内観光を行いました。ゼミ合宿は自分達で計画するため、自

分たちの選んだ場所で合宿が行えることもあり、楽しく充実していました。

本田ゼミナール（異文化理解から日本語教師養成へ）

本田 弘之

本田ゼミナールでは、いままで「異文化コミュニケーション」を主なテーマとして活動してきました。ゼミ生の約半分が留学生なので、学生同士が異文化をととても身近に感じられます。今まで自分たちが意識していなかったことが、他の国の人たちから見るととても信じられないことだったり、驚くことだったりして、たくさんの発見があります。このことから私たちが自分たちの国や生活習慣や文化の中で狭く生きてきたということがよくわかります。このことに気づくことが「異文化コミュニケーション」への第一歩なのです。

学生にはよく、「アルバイトをして、旅行しなさい。」とっています。異文化を理解するためには、まず、世界のいろいろな場所へ行って、異文化に自分の肌で実際に触れることが大切なのです。自分の生まれ育った地域だけですごしては異文化に気づき、理解することができないのです。その点、留学生はすでに日本という異文化のなかに身をおき、日常的に異文化体験をしているので、有利だということができます。ゼミナールで話し合っているときに、異文化体験のない日本人学生が、留学生の体験談にあらためて日本文化の特色を発見することがよくあるのです。



ただ、留学生が多いために、ちょっと困ったこともおきています。留学生の半数以上は、10月入学（編入）生なので、ゼミに所属する時期が、日本人学生とは半年ずれてしまいます。ゼミナールというものは、1年ないしは2年間、少人数のクラスで、一つのことをテーマとして研究するのが本来の姿だともうのですが、本田ゼミに関しては、半年ごとに所属学生が入れ替わるので、なかなか学生同士のコミュニケーションがとれません。そのため、ゼミの一体感がつくりにくいのです。この問題を解決し、学部改組にあわせて、もっと「日本語教師の養成」を意識したゼミをつくるのが、2007年度の課題です。

MCMillan ゼミナール（英語による自己表現の研究・詩の研究・創作）

MCMillan ゼミナール広報委員

ん？外国人の先生……。 「英語は苦手なんだよな、やめとこう。」と思ったそのあなた。そう、あなたです！ちょっとまって、大丈夫です。ノープロブレムなんです。何を隠そう、先生は日本語がペラペラ。外国人だなんてすぐに忘れてしまいますよ。

そして、詩の研究・創作……。 「とっつきにくそう。」「詩を書くなんて恥ずかしい。」

なんて思った、あなた。これまた、大丈夫！実は、初めのうちは僕も恥ずかしかったです。でも気がつけば今では、そんな恥ずかしさが、カ・イ・カ・ン（笑）。冗談はさておき、詩を発表するときの雰囲気はといえば、真剣に聞いたり、はたまた、クスッと笑ってみたりと、とても楽しい雰囲気ですよ。個人的に詩っていいなと思った点は、人の意外な

渡辺ゼミナール

難波 静香



「アメリカってどんな国?」「アメリカ人で誰?」さて、あなたならこの質問にどう答えますか? あなたが抱くアメリカ像は何を根拠にしたものですか?それは、偏った先入観による思い込みではありませんか?もしそうであるとしたら、誰が何を意図して私達にそのようなイメージを植え付けたのでしょうか。渡辺ゼミでは、アメリカの背景と人種差別問題を基にして「先入観」や「イメージ」の根源と、現実とのギャップについて研究し

ています。

並行して、与えられたテーマに対して論を組み立てる特訓をしています。「一つの主張に対して三つの視点から論を立てること」と「正しい日本語を用いて主張を適切に表現すること」は、なかなか困難であり毎回悪戦苦闘を強いられています。物事を異なった観点から捉える力は就職だけでなく、視野を広げることにもつながります。また、他人の論を批評、修正することは要点、焦点を正しく捉える練習にもなります。

ゼミは、学生主体であり、各々の発言によってはじめて成り立つので、畏縮することは誰一人として許されません。ゼミの方向性も学生の意向に沿って柔軟に変化するので、ゼミという場を生かすも殺すもゼミ生次第です。授業中は渡辺先生とゼミ生が毎回白熱した議論を繰り広げています。また、渡辺先生の知識と経験談の引出しの多さには毎度驚かされます。我々ゼミ生にとって渡辺ゼミナールは、刺激を求められる究極の場所です。



杏園祭をふり返って

杏園祭の中国語スピーチ大会 で日頃の成果を披露

教授 詹 満江

去る10月29日(日)、杏園祭2日目、東アジア言語学科1年生を中心とした中国語スピーチ大会が開催されました。1年生は春から中国語を学び始めたばかりです。わずか半年余りの学習に過ぎませんが、インテンシブ中国語履修者全員ががんばって日頃の学習成果を披露しました。この1年生を中心とした中国語スピーチ大会こそは、本学外国語学部のインテンシブ中国語ならではのものです。他大学の中国語のコンテストのほとんどは学習歴が2年以上の出場者で占められていて、中国に留学した経験のある出場者も多く、上手に話せて当然のコンテストなのです。しかし、本学の中国語スピーチ大会は、学習歴わずか半年の新生が発表する点に大きな特色があります。

他の多くの大学の中国語授業は、週2回の90分授業ですが、本学外国語学部のインテンシブ中国語の授業は週5回の90分授業です。それゆえ、学び始めてわずか半年でもスピーチ大会に出場できるレベルになれます。1年生たちは夏休みの宿題をきちんとこなし、どの学生も中国語スピーチの原稿を完成させました。本学部の中国語学習プログラムでは、長い夏休みの間も中国語の学習が継続できるよう、夏期集中講座の他、ヒアリング・中文和訳・和文中訳の宿題も出し、学生の語学学習を支援しています。夏休みの宿題の中の和文中訳は、中国語スピーチ大会で発表する原稿作りなのです。

大学四年間のうちに中国語を一定のレベルまで習得するには、ほとんど毎日学習することが大切だと考えています。毎日中国語に触れることで、学生たちは知らず知らずのうちに中国語の感覚を身につけていきます。決して無理をするわけではなく、良い環境に身を

置くことで、学生たちは気がつくとも中国語がわかるようになっていた、という状況が理想なのです。

中国語スピーチ大会本番では、さすがに緊張した学生もいましたが、たとえたとどしくても、みながんばって中国語でスピーチしていました。中には十分に練習していなかったのか、発表内容を覚えていなくて、原稿を見ながらのスピーチもありましたが、そういう練習不足の学生も、よく練習して受賞した学生や、留学帰りの上級生（審査が終わるまでの間、上級生が中国語と日本語で1年生に自分の留学中の経験談を話します）の流暢な中国語を聴いて、きっと自分の勉強不足を反省したと思います。スピーチ大会を開催する目的はまさにそこにあるのです。普段、つい勉強を怠りがちな学生もいますが、こうして一般の来聴者の前で自分たちの中国語の能力を競い合うことで、普段の自分の学習態度を反省する機会にもなり、また、互いに切磋琢磨し合う大切さを知ることもできるのです。

学生たちが本当の意味で本学部の中国語学習プログラムの良さを実感するのは、おそらくはずっと先のこと、きっと卒業した後でしょう。OBの中には各業界で中国語を使って活躍している先輩がたくさんいます。いま学んでいることの大切さをいま自覚するのは学生諸君にはあるいは難しいかもしれませんが。毎日の授業をこなすので精一杯かもしれませんが。でも、その努力は将来必ず生きてくることを忘れないでがんばってほしいと思います。

今年の中国語スピーチ大会の優勝者は、嶋崎雄輔くん、準優勝者は、北村恵美さんと菅澤美子さんでした。他にも受賞しておかしくないレベルの学生はいましたが、厳正な審査の結果、以上の3名が受賞の栄に輝きました。賞品（図書カード）はささやかですが、この受賞を励みとして、今後も大いに奮闘してほしいと思います。また、残念ながら受賞できなかった学生も、その悔しさをバネにし

て一層がんばって下さい。参加賞は中国茶の香片（ジャスミン茶）でした。丸い茶葉が湯の中で次第に開き、中から花が出てきます。学生たちの中国語の学習もこのお茶のようにきっと花開きますように。

杏園祭を振り返って

留学生による

日本語スピーチコンテスト

～言葉は新たな創造の種子

そして希望を生む～

外国語学科 4セメスター 大水 利之

昨年に引き続き、私たち杏林大学国際協力研究会は、2006年秋の杏園祭において外国語学部主催「留学生による日本語スピーチコンテスト」の企画運営に参加させていただきました。今回は多数の外国語学部学生有志や教職員の皆様の協力を得て、昨年よりも更に内容の濃い大会となったことを心より感謝いたします。

今年はコンテスト開催にあたり、テーマを「言葉は新たな創造の種子、そして希望を生む」と致しました。これは外国語学部で勉学に励んでいる私たち学生の理想をあらわした言葉です。言葉で自己表現をするということは、新しい理想を形作る第一歩にほかなりません。理想が語られた言葉から小さな芽が地表に顔を出し、それがやがて大きな希望に育ってゆく様をイメージして、私たちの想いを今回のテーマに込めた次第です。

コンテストの運営は、企画の準備段階から、すべて日本人学生と外国人留学生の混成チームが、一致協力して行ってきました。たくさんの日本人学生と留学生が、何回も討議を重ねながら、募集宣伝活動やポスター・式次第の作成、合同練習など、準備を通して互いに連帯感を深めることができたことは、何ものにも代えがたい貴重な国際異文化交流体

験だったと思います。また、これらの作業を通して先輩後輩の良き絆も築くことができました。

大会当日、8人の学生弁士たちは堂々と自信に満ちた素晴らしいスピーチを披露してくれました。今回より質疑応答を取り入れてみましたが、学生審査員のみならず、客席からも鋭い質問、ユニークな質問がなされ、会場を大いに盛り上げてくれました。

ここに、今大会に参加・協力してくれた学生たちのコメントを一部ご紹介致します。

審査員としての責務が大きかったが、発表者から良い刺激を受けた。(審査委員長、許硯輝) / 来日したばかりで日本語に不安があったが、コンテストで発表し自信を持った。(弁士、韓朝鶴) / 日本人の友人がたくさんできた。コンテスト準備期間中の日中学生の協力が素晴らしかった。互いに良い交流ができたと思う。(審査員、李金陽) / 司会を担当したが、発表者のレベルが皆、高いのに驚いた。(司会、玄維佳) / 多くの人と交流ができて楽しかった。(ランゲージパートナー、菅澤美子) / 先輩たちや留学生たちと知り合いになることができて、大変嬉しい。(ランゲージパートナー、仁科真実) / 大学生生活最後の良き思い出ができた。有難うございました。(審査員、浪江美紀) / スピーチをしたが、自分のレベルは、まだまだだと認識させられた。皆のレベルが高くて良い影響を受けた。(弁士、賈警君) / 留学生たちから大きな活力をもらった。(スタッフ、鈴木亮太)

今回、コンテストに出場、協力してくれた学生たちが、それぞれ新たな創造の種を蒔き、一つ一つの種から大きな希望の果実が実ることを望むとともに、この留学生によるスピーチコンテストが、今後ますます発展することを願ってやみません。

「第一回プレゼンテーション・コンテスト」をふりかえって

助教授 高木 眞佐子・伊藤 盡

2006年10月29日(日)、外国語学部英語系有志ゼミナールによる卒業論文研究発表会が開催された(D-301教室)。研究発表題目は発表順に、北知代「聖ゲオルギウスと竜退治」(伊藤ゼミ)、斉藤晃宏「日本語の発想と英語の発想：村上春樹の小説を通して」(稲垣ゼミ)、日高知里「ハロウィーンについて」(黒田ゼミ)、鈴木哲也「『ヴィヨンの妻』に見る太宰治の内の意識」(高木ゼミ)、竹村樹里「Hospitalityの語源と『ヨーロッパ文化における歴史的背景：Old English Hospitalityを中心に』」(原田ゼミ)(敬称略)。聴衆の投票に教員の評点を加味して順位を決定し、最優秀発表に鈴木哲也、優秀発表に日高知里が選ばれ、すべての発表者に賞品としてQuoカードが贈られた。

アメニティ委員会の助力で、杏園祭実行委員会を通じて杏園祭への参加が認められた。同委員会に謹んで感謝申し上げる。

外国語学科 6セメスター 堀口 翔

29日に私たち高木ゼミは、「プレゼンテーション・コンテスト」の運営を担当しました。このコンテストは各ゼミの代表者による卒論発表を行うもので、今年が初めての試みだったのですが成功と言えるものになりました。

準備段階では、ゼミ生一同が童心にかえったかのごとく、無数の折り紙や造花などを用い、教室を次第に華やかな会場へと変えていきました。プログラムや採点方法も、全て自分達で考えました。また、大量の印刷物は高木先生の多大なる協力のおかげで用意することができました。

コンテスト当日ではさすが各ゼミの代表者だけあり、様々な観点から各自の研究テーマ

を発表してくれました。優勝争いも熾烈なものとなり、集計作業にも緊張感すら走っていました。見事、接戦を勝ち抜いた四年生の鈴木さん(高木ゼミ)からコメントをいただいています。

~~~~~

「スピーチコンテスト当日はまず3年生の会場作りに驚き、発表者として気合が入りました。また当日は4年生の友人も会場に足を運んでくれ、緊張がほぐれ気持ちが楽になりました。

これまで私たちはゼミにおいて、それぞれの発表が少しでも良くなるよう互いに切磋琢磨してきました。私もパワーポイントの作り方から、質疑応答の仕方、また発表時の態度などゼミ生の良いところを参考にしました。

今回スピーチコンテストを無事に終えることができうれしく思っています。」

~~~~~

今回のコンテストは全体的に見てもレベルは高いものだったように感じます。質疑応答タイムでも、オーディエンスからの鋭い質問に、的確で尚且つ説得力のある答えを発表者の人達は述べてくれました。そして豪華な商品にも大満足してくれたようで、満面の笑みを見せてくれました。

私たちも準備や進行を担当したことで、終わった時には何か充実感に近いものを得ることができ、収穫のあるイベントとなった事大変嬉しく思っています。



編集後記

JEC 2006年度冬号をお送り致します。

秋から冬にかけてはいろいろな行事が目白押しです。特に大学のお祭りである杏園祭では、多数の学生が、日頃の成果を発表したり、日頃出来ない大仕事に取り組んだりしました。

学生諸君の生き生きとした姿の一部をお届けできれば幸いです。

KYORIN JEC 2006年 冬号

発行年月日	平成19年 1月15日
編集発行人	杏林大学外国語学部杏会 〒192-8508 東京都八王子市宮下町476 TEL 042(691)0011
印刷所	有限会社シーズ 〒186-0001 東京都国立市北 1 - 1 - 2 TEL 042(577)5995



<http://www.kyorin-u.ac.jp>



杏林大学
資料請求はこちらへ